

修士論文(要旨)

2016年7月

中国人留学生のストレス反応に及ぼす要因  
—文化差異の視点から—

指導 森 和代 教授

心理学研究科  
健康心理学専攻

214J4951

趙 智勇

Master's Thesis(Abstract)  
July 2016

Factors in the Psychological Stress Response of Chinese Students in Japanese  
Universities: From the Perspective of Cultural Differences

Zhiyong Zhao

214J4951

Master's Program in Health Psychology

Graduate School of Psychology

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Kazuyo Mori

## 目次

第一章 問題 . . . . . 1

第二章 方法 . . . . . 1

第三章 結果 . . . . . 1

第四章 考察 . . . . . 2

参考文献

## 第一章【問題】

日本の異文化環境での生活に適応することは非常に困難である(田中・横田, 1992 など)。近藤(1981)は、異文化適応に影響する要因として年齢、生活歴、性別、性格、文化要因、人間関係と関連している。Furnham&Bochner(1986)は、ソーシャルスキルによるアプローチは、異文化での問題解決のみならず問題の予防にも効果を持つ、最も直接的で効果的な介入方法留学生の支援手段として使われている。そして、ソーシャルサポートが多く研究されている(周他, 2002 など)。

異文化適応に対するソーシャルスキルではアサーションスキルがよくあげられている。佐野(1990)は、自己主張スキルと友人関係が、異文化適応度と高い相関と指摘した。しかし、機能しやすいソーシャルスキルの形態は、文化ごとに差異があるため、留学生が自国で機能するスキルが日本で使用したが、効果が薄いあるいは機能しないため、不適応に落ちたという可能性もある。さらに、近年、日本のアサーティブの研究(田中, 2011 など)によると、日本人のアサーション行動が攻撃傾向を示し、望ましい行動ではないと指摘した。岩崎(1998)によると、留学生の滞在時間と適応が負の相関と指摘した。留学生が日本人の文化に馴染んでいくほど、本来機能するアサーションスキルが機能しなくなり、さらに、逆効果になることが考えられ、長く日本に滞在する反対に不適応に落ちる理由であると筆者が考えている。

しかし、留学生現在の状況が多様で複雑である。違う国の留学生、本来所在する文化圏も異なる。さらに、中国のような領土の大きい国では、相違なる文化を生じる可能性もある。また、留學生活での自国出身者との接触頻度によっても適応の様式は異なると考えられる。そのため、本研究では、日本では最も多い中国人留学生を研究対象として、ラザルスのストレスモデルに従い、留学生の適応要因を検討する。さらに、文化差を検討するため、中国にいる中国人留学生と日本人大学生も調査対象を入れる。

## 第二章【方法】

調査対象者: 中国人留学生 119 名、中国人大学生 122 名、日本人大学生 145 名、年齢 21.25 ± 2.27 歳計 386 名。

測度: デモグラフィックデータ: 年齢、性別、高校までの生活地域、現在地域の滞在年数、日本人との接触頻度; 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生)短縮版; Tri-axial Coping Scale 24; 社会的自己制御尺度; Stress Response Scale-18; 在日中国系留学生用ソーシャルサポート尺度

## 第三章【結果】

中国人留学生、中国人大学生と日本人大学生の各尺度の下位因子間一要因の分散分析を行った結果: ほぼ留学生が優位だと確認できた。中国人大学生と日本人大学生の間差が確認されたのは「達成」日 > 中; 「情報収集」日 > 中; 「生活的サポート」中 > 日。

中国人の重回帰: 「抑うつ」: 「対人」負; 「達成」負; 「放棄」正; 「回避的思考」負; 「勉強」負。「不機嫌」: 「対人」負; 「達成」負; 「放棄」正; 「肯定的解釈」負; 「計画立案」正; 「感情欲求」負; 「勉強」負。「無気力」: 「達成」負; 「放棄」正; 「自己主張」負; 「勉強」負。

日本人の重回帰: 「抑うつ」: 「肯定的解釈」負; 「感情欲求」負。「不機嫌」: 「肯定的解釈」負; 「感情欲求」負。「無気力」: 「肯定的解釈」負; 「感情欲求」負; 「生活」正。

日本に一年あるいは一年以下しか生活していない「一年群」であり、一年以上日本に生活している

「一年以上群」。「一年群」:「抑うつ」:「達成」負の影響;「放棄」正の影響;「自己主張」負の影響。  
「不機嫌」:「情緒的サポート」正。「無気力」:「達成」負;「放棄」正。

「一年以上群」:「抑うつ」:「対人」負。「不機嫌」:なし。「無気力」:「達成」負。

日本人と月2回以上接触する「接触群」であり、日本人と月 2 回以下接触する「接触しない群」。「接触群」:「抑うつ」:「自己主張」負;「情緒」正。「不機嫌」:「達成」負;「カタルシス」正;「勉強」負;「情緒」正。「無気力」:「達成」負。

「接触しない群」:「抑うつ」:「対人」負;「放棄」正。「不機嫌」:「放棄」正;「感情欲求」負。「無気力」:「放棄」正;「気晴らし」負;「自己主張」負

南地方に在住した「南群」であり、中国の北地方に在住した「北群」。「南群」:なし。

「北群」:「抑うつ」:「放棄」正;「回避的思考」負;「自己主張」負;「生活」負。「不機嫌」:「放棄」正;「回避的思考」負;「情緒」正。「無気力」:「達成」負;「放棄」正;「自己主張」負

#### 第四章 【考察】

中国では、自己主張が独立変数として影響しているが、日本のほうが見られなかったゆえ、仮設の一部を支持した。情緒的サポートが留学生のストレス反応と正の影響がみられることから、留学生はサポートが必要される時、むしろ、危険な状況に落ちている時だと考えられる。

「一年群」では、「自己主張」が影響している代わりに、「一年以上群」では無影響になる。仮設の一部を支持した。時間が長くなると、留学生の適応パターンが日本人と同様になる可能性が考えられる。環境が変わっていないでも、適応に必要されることが変わることこそ日本の異文化適応が困難である理由ではないかと考えられる。

「接触群」と「接触しない群」の適応パターンが異なることから、仮設を支持した。宋他(2006)の研究でも、日本人からのサポート無意味という結果が出た。本研究は日本人との量的なデータしか測定していないから、留学生適応では日本人の友人が役に立たないことは質的な面である可能性がある。近藤(1981)が指摘された日本人の集団的社会と関連していると考えられる。「南群」と「北群」の適応パターンが異なることから、仮設を支持した。国文化だけではなく、地方文化も留学生の適応に影響している。

#### 【参考文献】

- 田中共子・横田雅広 (1992). 在日留学生の居住形態とストレス 学生相談研究, 13, 51-59.
- 近藤裕 (1981) カルチュア・ショックの心理—異文化とつきあうために— 創元社
- Furnham, A. & Bochner, S. (1986), Culture shock. Methuen & Co. Ltd.
- 周玉慧・深田博己 (2002). 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究 社会心理学研究, 17, 150-184
- 佐野秀樹 (1990). 異文化社会への適応困難度に関する研究—社会場面による分析 行動療法研究, 16, 37-44.
- 安田悠華・坂井誠・吉川吉美 (2012). アサーション能力に関する文化比較: 帰国子女と海外生活経験のない日本人の比較(一般演題(ポスター), テーマ: 認知行動療法の「今」) 日本行動療法学会大会発表論文集, 38, 182-183.
- 田中直樹 (2011) P7-31 アサーションの社会的特性に関する研究: 高校生・大学生における対象・状況ごとの分析から(測定・評価, 臨床, 障害, ポスター発表) 日本教育心理学会総会発表論文集, 53, 553
- 岩崎久美子 (1998) 日本における留学生の適応—適応モデルの妥当性と出身地域別相違— 産業カウンセリング研究, 2, 11-20
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成: 妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, 17, 82-94.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生)の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- 譚 紅艷・渡邊 勉・今野 裕之 (2011) 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望 目白大学心理学研究 7, 95-114.